論文

同時双方向型オンラインによるダンスの授業
－コミュニケーションに着目して－

向　出　章　子

Abstract

This study examined the effects of a simultaneous interactive online dance class (hereafter referred to as the "online class") on student communication. A survey was used to compare and contrast face-to-face and online classes. Seven face-to-face and six online classes were conducted to compare the results. A total of 293 first-year female university students participated in this study.

First, we administered a questionnaire survey before and after each class on the three components of the Communication Skills Scale: expressiveness, acceptance of others, and relational adjustment.

The results suggest that online classes may improve expressive communication skills. However, it did not enhance the interpersonal skills of acceptance of others and relational coordination compared to face-to-face classes. The results of the consciousness investigation showed that many students were satisfied with the online class as they found the group activities conducted in the breakout rooms to be effective. In addition, for first-year students who had yet to establish friendships, results indicated that online dance class time provided an excellent opportunity for communication. However, online communication between students was qualitatively different from direct face-to-face communication because it was difficult to perceive other people's bodies in the "here and now." Finally, in terms of the type of classes they would like to have in the future, many students indicated that they would prefer face-to-face classes.

１．はじめに

世界規模で流行しているCOVID－19の影響は，人類の生命に大きな影響をもたらし，さらには人々に心理的苦痛を強いている。日常生活では３つの密（密閉･密集･密接）を避け，人とのコミュニケーションがとりにくくなった。大学の授業は，対面授業が基本であった授業の枠組みがオンライン授業となり，互いに直接コミュニケーションをとる機会が減少した。臼山[1]は，「教育活動を通じた学生間，教員と学生の間の人間関係づくりが著しく阻害された」ことを指摘している。とりわけ，入学したばかりの１年生は，友達の名前・顔・性格もわからない。また，友達とのネットワークを持たない中で相談し合う関係も構築されていない。このような状況で学生達は授業においてどのようにコミュニケーションをとっていくのだろうか。

筆者が担当しているのは実技のダンスの授業である。実技の授業は対面で行う方が学習効果が期待できる[2]との報告がある。ダンスは，「『ダンスをすること』の内的体験の本質はコミュニケーションである」[3]といわれるようにダンスとコミュニケーションは深い関連がある。柴[4]は，「舞踊におけるコミュニケーションは，身体の動きが生み出す多義的で主観的な情報伝達を行うもので，人間の感性に働きかけるやりとりが主体である感性的コミュニケーションである」と述べる。菅原も同じく感情を共有するという視点に立っている。菅原[5]は，「身体的コミュニケーションのもっとも本質的な力は，人と人とのあいだにある種の＜一体感＞がかもしだされ，それが＜共有＞される瞬間のなかにこそ立ち現れるのではないか」と述べる。これらの先行研究をふまえ，本研究におけるダンスによるコミュニケーションとは「他者と身体によって相手の感情をやりとりする行為であり，身体の動きおよびリズムの共有・情動の共有によって感じ合うコミュニケーションである」と定義する。また，「言語以外にも相手の表情・視線の方向や身振りなど意識的・無意識的にもさまざまな手がかりから意味を読み取り，それを共有することでコミュニケーションが成立する」[6]と捉える。

これまでの対面でのダンスのコミュニケーションについて，多くの研究者がその効果を試みてきた。中野・岡田ら[7]は即興表現を中心としたダンス授業を実践し，その心理的効果を検討した。結果，他者とのコミュニケーションに自信を抱くようになったことを報告している。Hanrahanら[8]は，大学でのダンスの授業について質的研究を行い，ダンスに関わる親近感，類似性，絆を促進し，学生の個々の対人スキル，ダンススキル，メンタルや

パーソナルスキルの向上に役立つことを明らかにしている。対面授業におけるダンスの授業が，コミュニケーションや対人スキルなどにポジティブな影響を及ぼしていたことが明らかになっている。

一方，ダンスのオンライン授業による検証はまだ始まったばかりである。そのなかで，伊藤ら[9]は量的研究を行い，エアロビックダンスの遠隔授業が，活性度，快適度，覚醒度，安定度の気分の心理的効果に有効であることを明らかにした。また，コロナ禍のオンライン授業および自粛生活でのコミュニケーションの影響を調査した幅田[10]によると，コミュニケーション能力の低下やネガティブ思考など，自分の内面の表出の希薄さや精神面にマイナスの影響が多く見られたことを報告している。しかし，新しいコミュニケーションの確立や方法の選択など，伝達方法を工夫しようとする姿勢が見られたという。この研究は授業および自粛生活を対象にしているため，授業における影響は明確ではないが，学生の記述から新たなコミュニケーション方法を見出していた。オンラインのダンスの授業を行ったZihao[11]は，すべての生徒が1つの画面に表示されると即座に直接コメントを提供したり，生徒たちはチャットルームでコミュニケーションをとったりしていたことを報告している。オンラインによるダンスの授業を教えることは可能であるだけでなく，有意義な結果をもたらし，今後に示唆を与えるものであった。このように，オンライン授業の心理的効果や有効性についても明らかにされつつある。

筆者は，これまでダンスによるコミュニケーションに注目してきた。今，オンラインという授業形態においても学生同士が身体の動きを通して繋がることを大切にしたいと考えている。したがって，ダンスの授業をリアルタイムで交流する同時双方向型オンライン授業（以下，オンライン授業）を実施することにした。これまでダンスによるコミュニケーションとの関連については多くの先行研究があるが，オンラインによるダンスの授業のコミュニケーションに着目した研究は少ないのが現状である。

そこで本研究では，ダンスの授業について対面およびオンライン授業によるコミュニケーション・スキルとの関連について量的に検証する。次に，オンライン授業という形態で行ったダンスの授業が，学生同士のコミュニケーションにどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とする。なおここで使用する言葉について説明する。コミュニケーション・スキル尺度から使用した場合はコミュニケーション・スキル，文献を引用した場合は，コミュニケーションスキル，コミュニケーション能力とそのまま引用，学生の相互交流をコミュニケーションと記す。

２．方法

（１）調査対象

本授業の対象は，A大学教育学科に在籍している１年生で，対面授業の受講者193名のうち，有効回答が得られた187名である。同じくA大学短期大学部幼児教育学科に在籍する１年生で，オンライン授業の受講者111名のうち，有効回答が得られた106名が対象である。いずれも，小学校教諭・幼稚園教諭・保育士志望の学生である。

（２）調査時期

対面授業：2018年９月～2019年１月

オンライン授業：2020年６月～７月

（３）授業内容

対面授業は７回，オンライン授業は６回実施した。授業内容は表１に示した。対面授業の授業構成は，クラス全体で前回の授業の振り返り，本日の授業内容を説明し，クラス全体およびグループ（７～８人）の活動を行った。オンライン授業は，Google meetを活用し，対面授業と同様の全体指導，ブレイクアウトルームでグループ活動，クラス全体に戻りグループ発表（活動状況報告）という授業の流れを基本とした。いずれも授業の配慮事項は，心身をほぐしダンスへの抵抗感を和らげるためゲーム性のあるものも取り入れ，さらにダンスの技術の習得よりダンスを楽しむ経験を重視した。オンライン授業は，対面授業で行った指導方法の変更を余儀なくされたため，以下を工夫した。①身体の近接・接触を伴うもの，同じ空間を共有しないと成立しづらい内容は省略した。その他の内容も随時修正した。②全体指導ではグループ活動の内容について理解を深められるよう丁寧に指導した。③５，６人の毎回異なるグループで，活動は約30分～40分程度を充当した。④全体指導ではビデオのみオン，グループ活動では音声とビデオをオンにして行った。⑤伝達事項や情報交換はチャットを活用した。⑥授業終了時，学生はmeetから随時退出するが，教員に質問やコメントがある人は残ってもらい，学生に回答することで不安を軽減するよう努めた。なお，この授業の実施者は，本授業担当者である筆者である。

（４）調査内容

１）コミュニケーション・スキル尺度

本調査は，筆者が以前行った対面授業と今回のオンライン授業での調査結果と比較検討するために行った。用いるのは，藤本・大坊ら[12]が作成したコミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsである。本尺度は，コミュニケーション・スキルを基礎とし，その上位にソーシャル・スキル，さらに上位にストラテジーが位置する階層構造に関連付けられている。他の研究においても広く活用されており，汎用型尺度であることから本研究で用いた。この尺度は，自己統制・表現力・解読力・

表１　対面およびオンライン授業のプログラム内容

プログラム名と目標および内容の説明				
領域	対面授業		オンライン授業	
リズムダンス	目標	・さまざまな基本ステップを知るとともにリズムに合わせて楽しく踊る。		
	＜基本ステップ＞			
	ダンスの基本ステップ，サイド･前後･ボックスステップ･ツーステップ・ツイスト・キックとその応用をクラス全員で踊る。	1	教員の基本ステップの紹介の動画を見て練習。成果は課題で提出。この時のみオンデマンド型。	1
	＜リズムダンス＞			
	音楽にのって簡単な振り付けを踊る。教員の創作したジャズ・ヒップホップの動きをクラス全員で踊る。	1・2 3・4 5・7	教員が創作したジャズ･ヒップホップの動画および，ネット上の好きなダンスを視聴し個人で練習，または，自分で自由に踊る。いずれも動画に収め提出。	3 5
即興表現	目標	・表したいテーマからイメージをとらえ即興的に表現する。 ・リズムにのって全身で踊ることや仲間と共に踊ることを楽しむ。		
	＜シェーハ＞			
	頭の前に両手で山を作り，「シェーハ」の「ハッ！」で全員が決められたいずれかの動作を行う。リーダーと同じ動作になった人はアウト。全員で行う。	1	全体で教師がリーダーとなって行い，その後ブレイクアウトルームでグループ活動を行う。全体で活動を報告。	2
	＜名探偵ゲーム＞			
	鬼になった人のダンスの動きを全員まねながら行い，名探偵は誰が鬼かを当てる。	1	同じ空間が共有できないと成立しづらいため	×
	＜ミラーリング＞			
	グループで友達の動きをまね合う。まねする人とされる人が交代しながら行う。	1・3 5・6	全体では教師がリーダーとなって行い，その後ブレイクアウトルームでグループ活動を行う。動きは，画面越しで共有できる範囲に修正。全体で活動を報告。	2 3
	＜出会ってコミュニケーション＞			
	指示されたお題で，その時に出会った人とグループになる。動きながらコミュニケーションを行う。	2 5	身体の近接・接触ができない 同じ空間が共有できないと成立しづらいため	×
	＜エアキャッチボール・エア縄跳び＞			
	ボールや縄があるかのように相手に対応した動きを表現。	2	身体の近接・接触ができない 同じ空間が共有できないと成立しづらいため	×
	＜棒でコミュニケーション＞			
	棒を相手と一緒に支え，踊りながら移動する。グループで同じリズムで移動して棒を受け取る。	3	同じ空間が共有できないと成立しづらいため	×
	＜人間パズル＞			
	パズルのように，相手のポーズにはまるようにポーズをつける。	3	身体の近接・接触ができない 同じ空間が共有できないと成立しづらいため	×
	＜だるまさんの一日＞			
	だるまさんの生活を想像してお題を言い，イメージに合う動きを即興で表現する。全員で行う。	4	全員で，教員や学生がリーダーとなって行う。お題は画面越しで共有できる範囲に修正。	3
即興創作	目標	・表したいテーマからイメージをとらえ即興的に表現する。 ・仲間と共に様々な工夫のあるダンスを即興で創作する。		
	＜動く人間彫刻＞			
	グループで即興的に創作する。発表時，他のグループの人は，何をイメージしているか考える。テーマ(お誕生月･宇宙･台風･シンクロ･夏祭り・感情・遊園地等)	4 5	グループで「自由テーマ」を創作する。その成果を全体で発表する。グループで「青春」を創作する。その成果を全体で発表する。	2 3
民踊	目標	・様々な日本の民踊について知る。ソーラン節を力強く踊る。		
	＜ソーラン節＞			
	ソーラン節は，漁師のイメージで力強く踊る。全員･グループで行う。	6	教員が提示したソーラン節の動画をグループで練習する。その成果を全体で発表する。	4
まとめ	＜レポート作成＞			
	目標	・これまでの授業で学んだことをしっかり振り返る。 ・今まで学んだことを活かしながら，みんなでリズムにのって楽しみながら踊る。（対面授業のみ）		
	これまでの授業を振り返り，レポートにまとめる。	7	これまでの授業を振り返り，レポートにまとめる。 実技なし。	6

＊なお，表中の数字は，授業計画の時間を表す。×は未実施。

表2　コミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsの項目

階層構造	スキル	項目	項　目　文
基本スキル	表現力	自分の感情や気持ちといった情緒的な面の表出	自分の考えを言葉でうまく表現する
			自分の気持ちをしぐさでうまく表現する
			自分の気持ちを表情でうまく表現する
			自分の感情や心理状態を正しく察してもらう
対人スキル	他者受容	集団において互いに相手の意見や立場に共感・尊重する	相手の意見や立場に共感する
			友好的な態度で相手に接する
			相手の意見をできるかぎり受け入れる
			相手の意見や立場を尊重する
	関係調整	人間関係の中で人との関係を調整する	人間関係を第一に考えて行動する
			人間関係を良好な状態に維持するように心がける
			意見の対立による不和に適切に対処する
			感情的な対立による不和に適切に対処する

自己主張・他者受容・関係調整の６つのスキルからなる。本研究は，オンライン授業によるダンス学習場面における学生同士のコミュニケーションを調査するために，自分の感情や気持ちといった情緒的な面の表出である表現力（基本スキル），集団において互いに相手の意見や立場に共感・尊重する他者受容（対人スキル），人間関係の中で人との関係を調整する関係調整（対人スキル）の３つのスキルを使用した。それぞれの尺度の質問紙調査の項目は表２に示した。なお，学生への質問は，本尺度の項目文をそのまま使用した。

２）満足度についての意識調査

本調査は，オンライン授業の受講者を対象に，授業についての学生の意識として満足度とその理由について調査した。オンラインによるダンスの授業において学生のコミュニケーションにどのような影響を及ぼすかを検討し，学生同士のコミュニケーションを知るための手がかりとして行った。

３）今後望む授業形態についての意識調査

今後望む授業形態を質問した。学生達はこの身体性を重視したダンスのオンライン授業によるコミュニケーションを体験し，さまざまな意識をもったであろうと思われる。受講を終了し，今後，学生はどのような授業形態を望むのかを知る手がかりとして調査を行った。４つの授業形態「対面授業」「ハイブリット型」（対面とオンデマンド型の併用）「オンデマンド型」「同時双方向型」を提示し，そのうちのどれか一つを選択するよう求めた。

（５）分析方法

１）コミュニケーション・スキル尺度の調査

コミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsを用い，ダンスの授業前と全ての授業終了後に行った。質問内容には，「4，とてもあてはまる」，「3，だいたいあてはまる」，「2，あまりあてはまらない」，「1，まったくあてはまらない」とする４件法で行いこの数字を得点化した。対面授業の受講生は授業時間内に質問紙に回答した（回収率96.9％）。オンライン受講者は，自宅で行いGoogle classroomに提出するよう求めた（回収率95.5％）。以下の満足度調査，今後望む授業形態も同様に自宅で行い，Google classroomに提出するよう求めた。回収率も95.5％とすべて同じである。なお，コミュニケーション・スキル尺度の調査分析には，統計解析ソフトSPSS version 27を用いた。

２）満足度についての意識調査

満足度の質問は，「5，満足している」，「4，少し満足している」，「3，どちらともいえない」，「2，あまり満足していない」「1，全く満足していない」とする５件法で行った。選択理由は自由記述とした。理由の記述について，KJ法の手続きを参考に分析を行った。まず，理由の記述からラベルづくりを行った。次に，これらのラベルのグループ化を行った。同じ記述や類似しているラベルを一つのグループとした。小グループを編成しながら徐々に大グループへと集約を進めた。なお複数のカテゴリーが考えられたが，最も特徴的であると判断したカテゴリーに含めたものもある。見出したカテゴリーは，肯定的意見では，「かかわり」「楽しさ」「顔を合わせる」「ポジティブな意識」「時間の共有」「教員の工夫」，否定的意見として，「場の共有」「ネガティブな意識」「動き・リズムの共有」「通信環境」「かかわり」「顔を合わせる」の12個である。この分析については，筆者が主に検討し，大学相談室の臨床心理士・公認心理師と協議のうえで行った。

３）今後望む授業形態についての意識調査

今後望む授業形態の質問は，「対面授業」「ハイブリット型」「オンデマンド型」「同時双方向型」のうちどれか一つを選択するよう求め，人数の集計と満足度の群別に割合を求めた。

（６）倫理的配慮

倫理的配慮として，質問紙への回答は成績には関係しないこと，個人情報は守られることを説明し，同意を得られた学生を分析対象とした。

３．結果

（1）コミュニケーション・スキル調査の結果

対面・オンライン授業のコミュニケーション・スキルについて比較を行った。分析は，授業を独立変数とし，表現力・他者受容・関係調整を従属変数として２要因分散分析混合計画を行った。結果，表現力・他者受容・関係調整の全てにおいて交互作用が認められた（表現力：F（1，291）=14.46，p<.001，他者受容：F（1，291）=22.56，p<.001，関係調整：F（1，291）=17.72，p<.001）。（表３）

全てのスキルで交互作用が見られたため，単純主効果の検定を行った。授業と時期の交互作用を図１に示した。オンライン・対面の授業と時期において有意な単純主効果が確認された。具体的には，表現力は，オンライン・対面授業のいずれも授業後に有意な得点の上昇が見られた（対面：p<.001，オンライン：p<.05）。他者受容・関係調整は，対面授業において授業後に有意な得点の上昇が見られたが（他者受容・関係調整：p<.001），オンライン授業では有意な差は見られなかった。また，いずれも授業前ではオンライン授業の学生の方が対面授業の学生よりも有意に得点が高いことが示された（表現力:p<.05，他者受容:p<.001，関係調整：p<.001）。

表３　対面授業・オンライン授業の各尺度得点の平均値（標準偏差）の分散分析結果

	対面授業 (n＝187)				オンライン授業 (n＝106)						
項　目	授業前		授業後		授業前		授業後		群	時期	交互作用
表現力	2.73	(.50)	3.13	(.52)	2.87	(.55)	3.01	(.62)	.06n.s.	65.83***	14.46***
他者受容	3.32	(.42)	3.67	(.40)	3.60	(.48)	3.68	(.43)	11.16**	59.50***	22.56***
関係調整	3.17	(.46)	3.47	(.46)	3.45	(.42)	3.50	(.46)	12.05**	34.55***	17.72***

（　）は標準偏差　　**p<.01　　***p<.001

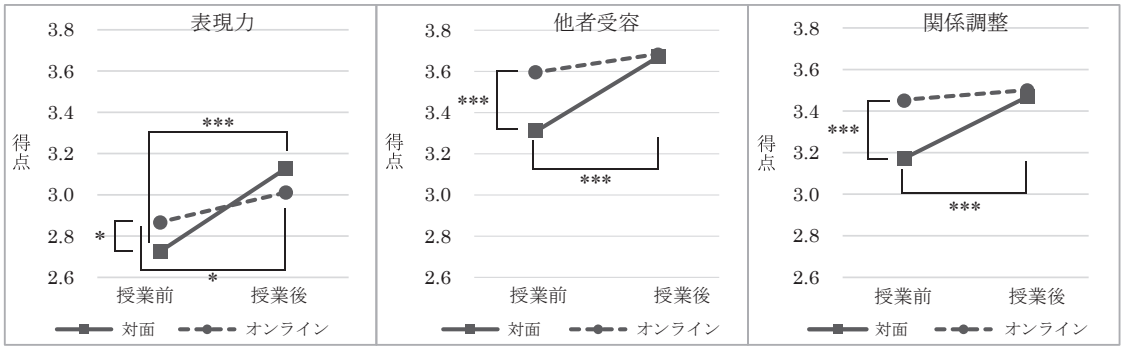

図１　時期と授業の交互作用　　*p<.05　　***p<.001

（2）満足度についての意識調査

1）満足度

満足度調査の結果を図２に示した。最も多かったのは，「少し満足している」61名（58%），次に「どちらともいえない」22名（21%），最も少なかったのは「全く満足していない」１名（１%）であった。「満足している」「少し満足」の満足群は78名（74%），「あまり満足していない」「全く満足していない」の不満足群は６名(6%)という結果であった。

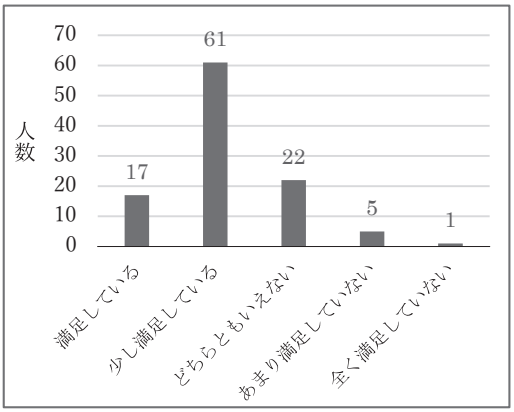

図２　オンライン授業の満足度

2）満足度の理由

満足度の理由は，コミュニケーションに関連するものに注目し，回答数は97個であった。見出したカテゴリーおよび満足度の群別の記述数は表４に，満足度の理由の記述内容は表５に示した。満足度の理由から，肯定的意見は51個（53%），否定的意見は46個（47%）と近似した割合であった。肯定的意見のうち満足群は46個，どちらでもない群は４個，不満足群は１個と満足群の意見が非常に多かった。否定的意見からは，満足群は31個，どちらでもない群は12個，不満足群は３個とこれも満足群の意見が多く見られ，どちらでもない群および不満足群の意見は肯定的意見よりも多く見られた。見出したカテゴリーは，「かかわり」「顔を合わせる」のみ肯定的意見・否定的意見で共通であったが，他のカテゴリーには違いが見られた。肯定的意見のカテゴリーは「楽しさ」「ポジティブな意識」「時間の共有」「教員の工夫」が見られた。否定的意見のカテゴリーは，「場の共有」「ネガティブな意識」「動き・リズムの共有」「通信環境」であった。最も多かった肯定的意見のカテゴリーは,「かかわり」(20個)「楽しさ」(20個) であった。否定的意見のカテゴリーは，「場の共有」（24個）が最も多く見られた。満足度別の理由は満足群の記述数が多いため，表５に示す通り満足群の理由の記述内容が多くなっている。

（３）今後望む授業形態についての意識調査

次に，今後望む授業形態について調査した。表６に満足度の群別に今後望む授業形態別の人数および割合を示した。対面を望む学生は59名，ハイブリッド型（対面とweb授業オンデマンドの併用）23名，オンデマンド型22名，双方向型２名であった。対面および対面を含むハイブリット型82名（全体の77%）とオンデマンド・双方向型というオンライン授業のみの24名（全体の23%）と比較すると対面授業の方を望む学生が多かった（$\chi^2=31.74$, $P<.001$）。どの群も50%以上の学生が対面授業を望んでおり，ハイブリット型を含めると，80%前後とかなり多くの学生が対面を含めた授業を望んでいることが示された。オンライン授業のみを望んでいた学生は，対面およびハイブリット型を望んでいた学生と比べるとどの群も少なかったが，対面の授業を望んでいない学生もそれだけ存在しているということも明らかになった。

表4　満足度の群別にみる各カテゴリーおよび記述数

意見	カテゴリー	満足群	どちらでもない群	不満足群	合計
肯定的意見	かかわり	19	1	0	20（21%）
	楽しさ	17	2	1	20（21%）
	顔を合わせる	3	1	0	4（4%）
	ポジティブな意識	3	0	0	3（3%）
	時間の共有	2	0	0	2（2%）
	教員の工夫	2	0	0	2（2%）
	合計	46	4	1	51（53%）
否定的意見	場の共有	16	8	0	24（25%）
	ネガティブな意識	3	2	2	7（7%）
	動き・リズムの共有	5	1	0	6（6%）
	通信環境	5	0	0	5（5%）
	かかわり	2	1	0	3（3%）
	顔を合わせる	0	0	1	1（1%）
	合計	31	12	3	46（47%）

表5　満足度の理由におけるコミュニケーションに関するカテゴリーと記述内容

意見	カテゴリー	理由の記述内容（例）	群
肯定的意見	かかわり	双方向授業でも，みんなの表情とか動きとか見て，みんなと繋がっている感じがした。	3
		画面越しではあったけど，クラスのみんなと繋がることができたから。	
		クラスの子とコミュニケーションをとり，みんなで体を動かすことで親しくなった。	
		グループに分かれて行うことで新しく友達と関わることができたので良かった。	
		体を動かすことができ，会ったことのないクラスメイトとの交流ができたため。	
		クラスの様々な人と言葉を交わしたり，教え合ったりするなど交流する機会があったから。	2
	楽しさ	画面越しで楽しくダンスなどを踊ることができたから。	3
		友達ができない環境から，ダンスのグループ活動を通して友達と話し一緒に踊るというのが楽しかった。	
		Web授業でグループワークを使っていて皆と仲良くなれた感じがして楽しかった。	
		ダンスをみんなで考えて発表することも楽しかった。	
		meetでのダンスの授業は，話したことのない友達と関わり，踊れたのが楽しかった。	
	顔を合わせる	双方向になったことで顔を見ながら皆と踊れるようになった。	3
		みんなと顔合わせができて良かった。	
		クラスの皆の顔を見ることができて，一緒に受けることができるのは，オンデマンドの授業より良くて受けやすい。	2
	ポジティブな意識	グループ活動を通して，みんなとコミュニケーションを交わすことができ安心した。	3
		友達と踊ることが有意義だと感じた。	
		グループ活動で関わりがなかった子とも関われて，一緒にダンスをする事で，みんなの違いを知れて良かった。	
	時間の共有	meetで同じ時間を共有しながらクラスの子と踊ることができた。	3
		オンラインで距離があってもmeetで繋がっている。	
	教員の工夫	とても楽しい授業を構成して頂き，グループワークで話し合うことができ，友達ともコミュニケーションがとれたから。	3
否定的意見	場の共有	ダンスの授業なので，本当はみんなと一緒に対面授業で体を動かしたかった。	3
		やはり実際に会って行う方がコミュニケーションを取りやすいし多くの子とダンスができる	
		満足はしているが，対面でできることに勝ることはないかなと思った。	
		画面越しではなくみんなと一緒にダンスをしたりしたかったから。	2
	ネガティブな意識	直接関わったことがないクラスメイトとmeetでダンスを踊ったりするのは少し気まずかった。	3
		一度も顔を直接合わせてない話したことのない人とダンスすることは，自分にとってハードルが高すぎた。	2
		ダンスや体を動かしたりするのはWeb授業じゃ少し1人でやるのは気が進まないから。	
	動き・リズムの共有	遠隔で，グループで動きを合わせるのはやはり難しいなと感じた。	3
		画面を通してなので，タイムラグでずれてしまったりしていたので，リズムなどを合わせて体を動かしたいなと思ったから。	2
	通信環境	ネット環境が悪いとき，聞こえづらくなったりするから。	3
		回線のダウンや音ズレしてよくわからず，やりとりがちゃんとできなかった。	
	かかわり	自分が人見知りなので，カメラ越しというのもあって緊張してしまって上手く話すことが出来なかった。	3
		直接会うことができないため，皆が相手の様子をうかがう時間ができてしまう。	1
	顔を合わせる	meetで顔出しをする授業が苦手だから。	1

＊群の数字は，満足度の群別を表し，満足群は3，どちらともいえない群は2，不満足群は1とした。

表6　今後望む授業形態の群比較

	群	対面	ハイブリッド	オンデマンド	双方向
満足度	満足	43（55%）	16（21%）	17（22%）	2（3%）
	どちらでもない	13（59%）	5（23%）	4（18%）	0（0%）
	不満足	3（50%）	2（33%）	1（17%）	0（0%）
	合計	59	23	22	2

＊%はそれぞれの群内における割合を表す。

4．考察

（1）コミュニケーション・スキル調査からの検討

本研究の調査結果から，対面授業およびオンライン授業によるダンスの授業が，学生のコミュニケーション・スキルにどのような影響を及ぼしたのかを検討する。対面授業において，基本スキルの表現力および対人スキルの他者受容・関係調整の全てが有意な得点の上昇が確認できた。オンライン授業においては，表現力が有意な得点の上昇が認められた（図１参照）。本研究で実施したオンラインの授業形態においても，表現力の向上に有効であることが示唆された。本尺度の「表現力」は，「自分の感情や気持ちといった情緒的な面の表出」を意味している。学生達はオンラインによるダンスの実技の授業内容の10個のプログラムのうち６個のプログラムにおいて即興表現や即興創作を経験している。即興表現の「だるまさんの一日」や「ミラーリング」では動きに応じた感情の表出が見られた。即興創作の「青春」では，苦しい部活の様子や恋のときめきの感情を表現したことをグループ発表時に報告していた。村田･吉久ら[13]は，即興表現がコミュニケーションとかかわりがあることを明らかにしているように，本授業で行った即興表現や即興創作の表現という学習過程が表現力の向上につながった可能性が考えられる。しかし，オンライン授業は対面授業と比較すると，対人スキルである他者受容・関係調整の向上は見られなかった。対人スキルは，コミュニケーション行動に影響を及ぼす上位の能力である[14]。オンライン授業は，他者との近接・接触もなく場所の共有もない画面越しのコミュニケーションである。そのうえ，通信環境の切断やズレなど人とのコミュニケーションのとりづらさが結果に影響を及ぼしていると推察する。

石川[15]は，「基礎スキル，対人スキル，社会的スキルは，通常の対面における対人行動場面におけるスキルであり，オンラインコミュニケーションは，通常のコミュニケーション時とは異なる環境ではあるものの，対人行動であり通常のコミュニケーションスキルが求められるのは明白である」と述べる。すなわち，オンラインのコミュニケーション･スキルは通常のコミュニケーション･スキルに基づいているならば，今回のオンライン授業においても，学生同士が通常の対人スキルを発揮しながらかかわっていたであろう。だとすれば，対人スキルの向上も可能であったはずである。おそらく筆者が行った今回のオンライン授業の環境が影響を及ぼしていた可能性が考えられる。その一つとして，オンライン授業は対面授業と比較すると授業回数およびプログラム数が少なく（表1）学生同士のかかわりの少なさが対人スキルの向上までつながらなかったことが考えられる。また，オンライン授業の学生の方が対面授業の学生より授業前のコミュニケーション・スキル得点が有意に高い学生達であった。そのために天井効果の可能性も示唆される。

（2）満足度についての意識調査からの検討

満足度の意識調査（図２）から，多くの学生がオンライン授業に満足していることが示された。満足群は全体の74%を占め高い割合であった。また，表４から満足度の理由の肯定的意見（51個）はカテゴリーである「かかわり」や「楽しさ」はそれぞれ20個と多かった。否定的意見としては，「場の共有」（24個）が最も多く，満足群やどちらでもない群に多く見られた。満足度の理由（表５）から，肯定的意見の「かかわり」の記述では，「クラスのみんなと繋がることができた」「みんなで体を動かすことで親しくなった」「体を動かすことができ，会ったことのないクラスメメイトとの交流ができた」等の意見が多数見られた。「楽しさ」では，「皆と仲良くなれた感じがして楽しかった」「話したことのない友達と関わり，踊れたのが楽しかった」等の記述が見られ，友達と繋がり一緒に踊ったりしたことを楽しんでいた様子が見られた。ほかにも「顔を合わせる」では，「クラスの皆の顔を見ることができて，オンデマンドの授業より良くて受けやすい」，「ポジティブな意識」では，「一緒にダンスをする事で，みんなの違いを知れて良かった」などからも友達と共に体を動かしたりしたことや友達の違いを知ることにもつながっていた。コミュニケーション・スキル調査で対人スキルの向上は見られなかったものの，初対面の学生同士のコミュニケーションはポジティブな経験となっていたことが伺えた。また，否定的な理由は，決して授業に対して否定的な態度ではなく，

「ダンスの授業なので，本当はみんなと一緒に対面授業で体を動かしたかった」「やはり実際に会って行う方がコミュニケーションを取りやすいし多くの子とダンスができる」という友達と直接会って一緒にダンスをしたかったという「場の共有」を望んでいる記述が最も多かった。

今回の調査から，この授業を通して満足感を左右するのは，学生同士のコミュニケーションのなかでも，初対面の学生同士がダンスを通してかかわり親しくなったことや交流しながら踊る楽しさが最も影響を及ぼしていたと考えられる。そのコミュニケーションの場として大きな役割を担っていたのは，身近な感覚で学生達が交流するグループ活動の場であったと思われる。学生の記述から，「グループに分かれて行うことで，新しく友達と関わることができたので良かった」「友達ができない環境から，ダンスのグループ活動を通して友達と話し一緒に踊るというのが楽しかった」「グループ活動を通して，みんなとコミュニケーションを交わすことができ安心した」等，そのほかにもグループに関する記述が多数見られた。学生の発表からは，ネット環境が悪くグループ活動の終了間際にブレイクアウトルームに入った学生に，初対面のクラスメイトがグループ発表の振り付けを優しく教えてくれた喜びをエピソードとして報告していた。さらに，このグループ活動は毎回ダンスグループ名を考える活動も含まれ，動きとは別の次元で盛り上がったとの報告もあった。オンラインのグループ活動がいくらかストレスを和らげ，学生の孤独へのサポートになりうる[16]という研究報告もあるように，本授業のコミュニケーションの体験においても，孤独な学生の心理的なサポートの役割を果たしていたのではないかと推察する。くわえて，このブレイクアウトルームの閉ざされた空間がかえってグループ内の関係性を強めたことにつながったのかもしれない。しかし，単にグループ活動の場を設定すればよいわけではなく，行いやすい・楽しい内容の工夫，グループ活動前の丁寧な指導とグループ内の協力や充実した活動となるために発表・報告などを取り入れるなど構造化された場の設定が必要と考える。

2021年の文部科学省[17]の調査では，学生はオンラインでもグループワークや教授からのフィードバックなど，一方通行ではない双方向のやり取りに関する工夫を求めていたという。学生達にとってこの授業におけるコミュニケーションはポジティブな体験となり，オンデマンド型では得られない初対面の学生同士のコミュニケーションの良い機会になっていたことが考えられた。しかし，満足している学生が多いにもかかわらず否定的意見も見られた。これについては対面授業およびオンライン授業の質的な相違点で述べることにする。

（3）今後望む授業形態

今後望む授業形態の意識調査から，オンライン授業に満足しているにもかかわらず対面授業を望んでいる学生が最も多く，対面と対面およびオンラインのハイブリッド型を合わせると82名(77%)の学生が対面授業を望んでいた（表６参照)。満足度の理由（表５）から，友達と一緒の場を共有するダンスを求めている意見が最も多かった。さらに通信環境の影響によりやりとりができにくいということを実感している意見も見られた。このように，学生達はオンラインによるコミュニケーションのとりづらさに直面したため，対面のコミュニケーションのとりやすさと比較すると人とつながる感覚が対面よりも得られにくかったことが背景にあると考えられる。同じ場を共有することが学生にとってはごく自然な人とのふれあいであり，人との直接的なかかわりを求めていたと考えられる。

（4）対面授業およびオンライン授業の質的な相違点

対面授業およびオンライン授業のコミュニケーションの質的な相違点について考察を加えたい。満足度調査からオンライン授業におけるコミュニケーションは，肯定的・否定的意見が混在しており，それぞれ感じ方や捉え方によって表裏一体であった。ここでは質的な相違点について３点述べていきたい。

1）「いま，ここ」での時空間における身体

はじめに筆者が対面授業およびオンライン授業の質的な相違点として最も言いたいことは,「いま,ここ」での時空間における身体である。前述したように「やはり実際に会って行う方がコミュニケーションを取りやすい」「画面越しではなくみんなと一緒にダンスをしたりしたかった」等，場を共有し，ダンスでの直接的コミュニケーションを望んでいる意見が多く見られた（24個)。本研究で行ったオンライン授業のプログラムは，同じ場としての空間が共有できなければ成立しにくい「名探偵ゲーム」「出会ってコミュニケーション」「エアキャッチボール・エア縄跳び」「棒でコミュニケーション」「人間パズル」は省略した。このように，オンライン授業では「場の共有」を体験できない。そのほか,肯定的意見の「時間の共有」では,「同じ時間を共有しながらクラスの子と踊ることができた」と時間でつながっているという感覚が得られていた記述が２個見られた。一方,「動き・リズムの共有」では，６個の否定的意見が見られた。例えば「遠隔で，グループで動きを合わせるのはやはり難しい」「タイムラグでずれてしまったりしていたので，リズムなどを合わせて体を動かしたい」のように動き・リズムが崩れ同調しにくい記述が見られた。ダンスの授業を

双方向のリアルタイム・対話形式で試みた高橋[18]は，オンライン授業の可能性や成果を見出していたが，課題として，「生身のからだがダイナミックに交感する中で生まれる授業の雰囲気を頼りに，直観的・即興的に授業を組み立ててきたやり方は，画面越しでは学生の様子が掴みにくく，他者との『かかわり』を核にして動きやイメージやリズムを共有して表現するダンスの本質がなかなか実践できなかった」ことを挙げている。対面のダンスは，オンラインと違い，互いの身体の動きの共有を通して他者の表情・感情・息づかい・体温・場の雰囲気を意図的・無意図的にじかに感じとることができる。それが，他者との動きやリズムの共有の感覚，互いの体が同調・共振する感覚を生む。本授業のオンライン授業においてもその感覚は得にくいものであった。長岡[19]は，「同調傾向は円滑なコミュニケーションの指標としてみなされ，ラポールをもたらしたりポジティブな対人印象をもたらしたりすることが示されてきた」という。対人関係において，同調傾向は円滑なコミュニケーションを行う上で重要な要素であることを示している。また，同調と場の関連について清水は「内観的な身体性（内観的な身体の空間性や時間性）が場の情報に反映している」[20]と述べる。さらに「身体的同調は場所的合意の印である。すなわち自他非分離的な世界が二人の間に生成して，二人が共通のコンテキストのもとで情報を交換している印である」[21]とも述べている。つまり，互いに引き込み合う（自他非分離的）場の共有は同調を生み出す要素であると捉えることができる。柴[22]は，「舞踊はまるごとのからだで，『場』に応じた表現（リアルタイムの創出）を他者と共有し，互いの身体が自他非分離的に同調していく体験は，ネットを介したコミュニケーションと対極にある」と述べる。このように考えると，オンラインではこのような「場の共有」がなく，他者とのリズムや情動の共有を感じにくく，同調しにくいのは当然のことであった。「満足はしているが，対面でできることに勝ることはないかな」の記述に代表されるように，ダンスにおける「いま，ここ」での時空間における身体は，他者の身体をじかに感じることができないオンラインとは質的に最も異なるものであると考えられる。

２）身体の近接・接触

オンライン授業は身体の近接・接触が体験できないことは自明のことである。例えば，対面授業で行った「人間パズル」というプログラムは，身体の近接・接触を伴うものであった。このプログラムは，相手のポーズに自分の体をパズルのようにはめていき，グループで即興的に一つの形を作っていくものである。動きの例を挙げると，一人の学生が友達の両足の間に自分の体をピタっとパズルのようにはめた。すると，グループ内で自然発生的に笑いが起きた。そこから他者との偶発的に起こるユニークな動きや友達とのバラエティに富んだ動き，他者の身体に自分の身体を絡ませていくという動きが見られた。このような身体の近接・接触は，他者の身体をじかに感じ，いつの間にか自己身体にも似た感覚が生まれる時もある。オンライン授業で省略した「出会ってコミュニケーション」や「エアボール・エア縄跳び」も身体の近接・接触のあるプログラムであった。このような他者身体とじかに触れ合う体験は注意深く行う必要はあるが，他者と近接な関係を生むと思われる。﨑山[23]は，「タッチングとはまさに相互性の問題であり，他者との関係性の問題である」と述べるように，関係を築くための一つの大きな要素といえる。しかし，オンライン授業では機能させることができず，身体の近接・接触の有無は対面・オンライン授業における異なる点であったといえる。

３）画面越しのコミュニケーション

画面越しのコミュニケーションに関する学生の記述において，表５から，肯定的意見の「かかわり」では，「双方向授業でも，みんなの表情とか動きとか見て，みんなと繋がっている」，「楽しさ」では，「画面越しで楽しくダンスなどを踊ることができた」，「顔を合わせる」では，「双方向になったことで顔を見ながら皆と踊れるようになった」のようにネットを介した画面越しのコミュニケーションが成立している。一方で，否定的意見の「かかわり」から満足群の意見として，「カメラ越しというのもあって緊張して上手く話すことが出来なかった」，「ネガティブな意識」から「直接関わったことがないクラスメイトとmeetでダンスを踊ったりするのは少し気まずかった」，不満足群の「かかわり」から「直接会うことができないため，皆が相手の様子をうかがう時間ができる」，「顔を合わせる」では，「meetで顔出しをする授業が苦手だから」という記述が見られた。満足群・不満足群にかかわらず，オンラインによるダンスの授業について否定的な意見が見られた。オンラインによる画面越しの相手との対峙は，つながっている感覚と他方緊張感や気まずさという両面の様相が見られ，また，探り探り相手と対峙している様子も見られた。通常相手との対峙は対面での対峙と共通点があるが，自分の姿が画面に映し出され正面で注目される感覚は，また対面とは異なる感覚を生むものである。また，「通信環境」からくる回線のダウンや音ズレがコミュニケーションのとりづらさにつながっていた。画面越しのコミュニケーションについて，石丸ら[24]は，オンライン（バーチャル空間）とオフライン（リアル空間）の間には，あらゆる場面において小さくない

ギャップが存在していることを指摘する。そして，情報を効率的に伝えられないことによってコミュニケーションの質が低くなっている可能性があることを示唆している。

以上，対面授業とオンライン授業の質的な相違点を３点述べた。オンラインによるダンスの授業のコミュニケーションが，学生同士の人間関係の構築につながり満足している学生も多かったが，対面授業と比較するとオンラインのネガティブな差異が学生に困難や心理的な負荷を感じさせていたことも事実であった。

５．まとめ

本研究は，ダンスの授業について対面およびオンライン授業によるコミュニケーション・スキルとの関連について検証し，さらに，オンライン授業という形態で行ったダンスの授業が，学生のコミュニケーションにどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることであった。本研究の調査結果からいえることは，第一に，オンライン授業はコミュニケーション・スキルの表現力の向上が見られたが，対面授業のように他者受容・関係調整の向上は見られなかった。それは，オンライン授業の授業回数やプログラム数の少なさおよびネットを介したオンライン授業の特徴からくるネガティブな点が影響していると思われる。第二にオンライン授業を受講する中での友達とのコミュニケーションは，初対面であった学生達のコミュニケーションの良い機会になっていたことが考えられた。第三にオンライン授業に満足している学生が多く，その理由はブレイクアウトルームで交流するグループ活動が有効であると考えられた。第四にオンラインのコミュニケーションは対面のコミュニケーションと質的に異なることが考えられた。オンライン授業は，学生達が「いま，ここ」での他者の身体を感じにくく，人とつながる感覚が対面授業よりも得られにくかったということが考えられた。学生はオンライン授業に満足していたにもかかわらず対面の授業を望んでいる学生が多い傾向が示された。同時双方向型オンラインによるダンスのコミュニケーションは，ポジティブ・ネガティブの両面が浮き彫りとなった。

課題として，このオンライン授業は対面授業で行った内容・方法には限界があったため，身体の近接・接触ができない，同じ空間が共有できないと成立しづらいプログラムは省略し，その他のプログラムも修正を余儀なくされた。さらに，一度も直接顔を合わすことがない学生同士のオンラインの授業というこれまでなかった授業形態であり，対面授業と相違点があり条件も異なった。そのため，対面授業との比較におけるコミュニケーションについて一般化は難しいと思われる。また，今回の調査がダンスの授業によるコミュニケーションについて具体的に回答を求める質問紙であれば，さらに詳細な示唆が得られたであろうと思われる。しかし，今回の研究で得られた知見はオンライン授業におけるコミュニケーションの傾向や可能性を見出せた。

白山[25]は，「アフターパンデミックの世界が，人間のコミュニケーションのあり方を大きく変えるだろう，これまで以上に他者への『共感力 empathy』が重要視される」と言及している。今や日常生活では３密を避け，対面で授業を受講する体験はできなかったが，人とのコミュニケーションについて再確認できる機会であった。岩崎[26]は，「ICTを介したコミュニケーションを，単に対面コミュニケーションと比較して「失敗」や「問題」が起こりやすいと論じるより，その積極的な意義や可能性と併せて探究する視点が重要である」ことを指摘している。今後，対面・オンラインの様々な授業形態のそれぞれの良さを活かしながら，ダンスの授業におけるより良いコミュニケーションの方法を検討課題としたい。

引用・参考文献

1 臼山利信，2021，「『コロナ禍』のオンライン教育とコミュニケーション」，筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集，36：1.

2 服部辰広・松田康宏・伊藤譲・久保山和彦，2022，「対面授業と比較した遠隔授業の学習効果に関する研究―保健医療学部整復医療学科学生に対するアンケート調査より―」，日本体育大学紀要，51：1001－1009.

3 松本富子，2003，「ダンスのコミュニケーションから何が生まれるか」，女子体育，45（2）：28－29.

4 柴眞理子，2018，「臨床舞踊学への誘い　身体表現の力」，ミネルヴァ書房：72.

5 菅原和孝，1996，「ひとつの声で語ること―身体とことばの「同時性」をめぐって―」，菅原和孝，野村雅一（編），コミュニケーションとしての身体，大修館書店：248.

6 植村勝彦・藤井正志・松本青也，2000，「コミュニケーション学入門―心理・言語・ビジネス―」，ナカニシヤ出版：6－10.

7 中野優子・岡田猛，2012，「即興表現を中心としたダンス授業実践とその効果―大学生の心理的変容に注目して―」，舞踊學，2012（35），53－64.

8 Hanrahan, S, & Pedro, R, 2017, Team-building activities in dance classes and discoveries from reflective essays, *Asia-Pacific Journal of Health, Sport and Physical Education*, 8(1)：5366.

9 伊藤理香・林田はるみ・諏訪部和也，2021，「大学のスポーツ実技（エアロビックダンス）における対面授業及び遠隔授業の心理的効果」，東海学園大学教育研究紀要，6：24－32.

10 幅田彩加，2021，「コロナ禍での気づきと学びを求めて―オンデマンド授業・様々な制限の中での対面授業―」，女子体育，63（２・３）：34－39.

11 Zihao (Michael) Li, 2020,「Teaching Introduction

to Dance Studies Online Under COVID-19 Restrictions」, *Dance Education in Practice*, 6（4）：9－15.
12 藤本学・大坊郁夫，2007,「コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み」, パーソナリティ研究，15（3）：351－352.
13 村田芳子・吉久一枝，1994,「ダンス教育における即興表現についての検討―特にコミュニケーションに注目して―」, 岡山大学教育学部研究集録, 11（95）：1－12.
14 再掲　12：359.
15 石川真，2020,「円滑なオンラインコミュニケーションを実現するためのスキルに関する研究」，上越教育大学研究紀要，39（2）：247－256.
16 樋口広思・越中康治・久保順也・平真木夫・田端健人・梨本雄太郎・本図愛実，2021,「コロナ禍における大学の遠隔授業～学生アンケートの数量的・質的分析をもとに～」，宮城教育大学教職大学院紀要，2：53－72.
17 文部科学省，2021,「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」, https%3A%2F%2Fwww.mext.go.jp%2Fcontent%2F20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
18 髙橋和子，2021,「コロナ禍における遠隔ダンス授業の成果と課題―双方向のリアルタイム・対話形式の学び―」，環境と経営:静岡産業大学論集，27（1）：13－26.
19 長岡千賀，2006,「対人コミュニケーションにおける非言語行動の2者相互影響に関する研究」，対人社会心理学研究，6：101－112.
20 清水博，1996,「生命知としての場の論理―柳生新陰流に見る共創の理」，中央公論新社：70.
21 清水博，三輪敬之，久米是志，三宅美博，2000,「場と共創」，NTT出版：161.
22 再掲　4：83.
23 崎山ゆかり，2007,「タッチングと心理療法 ダンスセラピーの可能性」，創元社：9.
24 石丸大稀・藤本まなと・中村優吾・諏訪博彦・安本慶一，2021,「リアル/バーチャル空間のコミュニケーションの違いとその差を埋めるAR技術の検討」, 2021年度情報処理学会関西支部支部大会講演論文集.
25 再掲　1：2.
26 岩崎浩与司，2019,「テレコラボレーションにおける対話環境の構築―ウェブ会議システムを使った日本語対話の実践から―」，e-Learning 教育研究，13：29－41.